経管栄養入所者のケアの検討

～居室移動前後の体温比較を行って～

介護老人保健施設　池田苑
発表者：下地　一矢

【はじめに】

高齢者人口が増加する中、療養病床の削減や長期入所者の重度化などにより当苑生活療養課においても入所者の高年齢化・介護の重度化が進み、経管栄養者が増加している。このような状況から平成20年6月に重度化した入所者のケアへ対応するため、夜勤の介護職員を3名から4 名へ増加し、経管栄養を行っている入所者の増加対策と、より丁寧なケアを行うことを目的として経管栄養者16名を3階から2階へ居室移動を行った。今回、居室移動後のケアの内容を検証することを目的として経管栄養者の体温に着目し、居室移動後の比較検討を行った。

【対象及び方法】

平成 20 年 4 月～10 月の調査期間中に継続して経管栄養を行っている入所者 8 名を対象とした。居室移動前の前期（4 月～6 月）の 3 ヶ月間と居室移動後の後期（7 月～9 月）の 3 ヶ月間、計 6 ヶ月間の対象者の体温をカルテより調べた。

【結果】

前期では37.3度以上の発熱総日数は8人全員で 214 日あり、微熱の 96.3%を占めていた。一方、後期では 8 人全員で 166 日と前期と比べて 48 日間減少し、微熱の日数は発熱総日数の 94.6%を占めていた。居室移動前と比較すると 8 人中 6 人が発熱の日数が減少していた。また、体温の平均値でみると 37.0（0.6）であり、後期の平均体温は 36.94（0.5）と有意差がみられたが、3 人の対象者では有意差がみられなかった。

【考察】

微熱の日数は 49 日減少しており、口腔ケアの充実が影響したと思われ、今後さらに言語聴覚士などリハスタッフと連携しながら適切な口腔ケアの知識や実践が重要と思われた。また、体温の平均値ではトータルでは有意に後期で体温が低くなっており、有意差の見られなかった 3 名は口腔ケアの拒否が強く口腔ケアを丁寧に行うことが出来ない等の原因が考えられ、認知症高齢者への口腔ケアのアプローチが重要と思われた。今回の調査では、微熱日数が比較的多く、平均体温も高めであり、時間的も夕方測定時の微熱が殆どであった。高齢者は体温調節機能の低下に加え、寝たきりによる廃用症候群や四肢間接の拘縮により下肢体温の低下から体幹部の熱が上昇することが言われている。さらにうつ熱による影響が考えられた。夕方測定時には体温が高いのは日内変動による影響が大きいと考えられ、下肢体温測定前の腋下部のうつ熱に対する対応が必要と思われた。